

信 毎 歌 壇

小池 光 選

母逝きて半年経ちて夏となり暑と障子新しくする
 暑君に虐げられたる民のこゝろ炎天下なだれアスフ
 アルトをゆく (長野市) 宮崎 昌
 担任が宿直の夜学校へ遊びに行った昭和の時代
 (長野市) 原田りえ子
 じりじりと太陽照らす草中に大きなスライカ隠れて
 (御代田町) 柳沢 光雄
 るたり (中野市) 増田きみ江
 山に行き母と杉の葉拾ひしは遙けき戦後思ひ出消
 (飯綱町) 坂井 春男
 女医さんに腸の検査の結果聞く腸の写真が何故か
 (佐久市) 小泉 英介
 恥ずかし (小諸市) 徳原 昭枝
 若き日の思い出いつこ須臾の間に九十七となりし
 (長野市) 原田 浩生
 心地す (長野市) 近藤 光子
 サイフォンの原理知りたるよるこびに実践したり
 (長野市) 島田 伶子
 き風呂桶の湯に
 夕暮れを「青い夜だね」といふ幼力ナカナ澄みて
 (長野市) 近藤 光子
 月のぼりくる
 鐘の音に合わせ黙禱一分間畑で祈る核なき地球を
 (長野市) 島田 伶子
 試合後の静けき土に残りおり球児の涙と汗のきら
 (佐久市) 高橋衣里子
 めき
 その昔鹿が教えたお湯という「かけゆ」と読めぬ
 (長野市) 松本 博人
 鹿教湯温泉

第一首、母が亡くなっても、誰が亡くなってもわたしたちは生きていかねばならない。半年経って暑替えて障子を張り替える。しずかな、しかし力強い生きる力が伝わってくる。第二首、今年の夏の暑さは尋常でない。歩くだけでぐくぐく然らなってしまう。上句の比喻が強く、的確である。第三首、むかしの学校は宿直制度があり、先生が交代で泊まったものだ。先生を慕う生徒の気持ちが伝わる。

小島 なお 選

緑茶含み未来地球を考へる通か遠くのかさきみ
 どり (東京都小平市) 真鍋 真悟
 流れゆく水には音と光とがそして誰かの伝言が
 (安曇野市) 細川 恒
 り「今日の献立揚げパンです」ふりむけば魔校の屋
 素題如く (佐久穂町) 太田 春子
 ここ一番すくを出したい時だけは長野県人にまた
 なつてみる (千葉県船橋市) 長田 尚子
 花柄の座布団「枚置かれおり無人駅にも朝の賑わ
 (千葉県船橋市) 清水 渡
 い色褪せし虎ロープ揺る老舗跡をここに明治軍戦
 ぎつつ (佐久市) 木内利一郎
 いきおいでエアコンも一つ買つて息子に叱ら
 れしことを寂しむ (千曲市) 関 津和子
 実家じまい仏壇寺に持ち出せば青大将のはい出し
 (長野市) 山田登志夫
 て来ぬ
 隣家の一家ひょいっつとフェンス越え近道とする小
 (松本市) 近藤ひろ子
 一もママも
 既読だけ見れば安心する友へ今夜は返信するのは
 (松本市) 川久保恵子
 よそう
 佳作
 白杖の歩みを止める救急車追いつけば音消え
 (千曲市) 上原 博司
 るまで
 クーラーの設置に日毎駆け回る電気屋さんが熱中
 (松本市) 松島 房子
 症に

第一首、未来のどこかに残っていてほしいと願う「さきみどり」の土地。それは緑茶の色のように澄むゆえに儚い。第二首、何度も失われそうになりながら先人たちが守ってきたものとは。水の感星に思う。第三首、校内放送だろうか。記憶の底の懐かしい声を聞きながら、猛暑を乗り切る素題を今日も。第四首、「ずく」の語源は「尽くす」という説も。故郷の言葉は、自分の源の力を引き出してくれるのだ。

米川 千嘉子 選

今日からはひとりになるけど待ってね山林の涼
 しき墓地に夫の納骨 (木相村) 佐々木千代子
 触れなくて手をのびしたが月でした きみもたふ
 ん そんなひとです (安曇野市) マルコ
 あののどかな「森のくまさん」歌ったころに戻
 れぬ 人間も熊も (千曲市) 関 津和子
 「テレビっ子」昭和を生きて歳を重ねて戻りぬ
 また「テレビっ子」 (長野市) 宮崎 信博
 分水嶺に信濃上野分かれたて方座への道猪蹄活高
 (長野市) 近藤 光子
 し
 きつとこれ当たつてるよね未発表の宝々じだが棺
 に入れた (塩尻市) 藤森 円
 灼熱の道路を渡るアオダイショウ決死の形相吾は
 息呑む (佐久市) 佐藤千栄子
 若き日のヒールの痛み懐かしくラ・クンパルシー
 (東御市) 渡辺美保子
 タ沁みる夏の夜
 老いた牛手放す前夜塩紙めさせ首を撫づれば鼻す
 り寄せる (千葉県船橋市) 清水 渡
 価値観のすれに気付かぬふりをして否定しあいて
 会話途切れる (長野市) 宮崎 昌
 佳作
 一日をベッドの上に横たわりたいまには休みたいと
 (長野市) 原田りえ子
 いう母
 百歳の間近な人と連れ立ちて体操をせり師の声と
 (長野市) 池田よし江
 おる

第一首、亡き夫と別れがたくお骨をずっと家に置いていたのだ。「山林の涼しき墓」に独特の実感がある。第二首、「月」には手が届かない。触れようもなく、一人のものにもならない。第三首、熊が人を襲うニュースが多くなった。童謡を思い出しては時代の変化に驚くが、驚いているのは「熊も」同じだ。第四首、老年になってまた「テレビっ子」へ。ちょっとユーモラスでシニカルな響きだ。